

表現論から教わったこと

鄭 東吉

平成 21 年修士課程修了



みなさん、こんにちは。

2009年に修士課程を卒業しました鄭です。出身は中国で、学部を卒業後、日本の大学院に留学にきました。

数学教室でのゼミは加藤信一先生の表現論でした。教科書としては J. E. Humphreys の “Introduction to Lie Algebras and Representation Theory” をゼミで使っており、先生から「なるべく英文のオリジナルを読むように」と推奨されました。しかし、当時英語を読むのが嫌いだった私は、中国語訳のバージョンを国から一冊取り寄せて、自宅では中国語で学習し、ゼミで発表するときは英語の本を手にとって読むという、ある意味ズルをしました。今

となって人に言えるようになった恥ずかしい話ではあります。

ただ、あの時のことが後からもずっと気にかかってしまい、どうしても忘れられることができませんでした。そこで、会社に就職してからは腹をくくって TOEIC を猛勉強し始めました。そして2年間かけてスコアを500程度から900点台まで伸ばすことができ、やっと気持ちが晴れるようになったのです。

以上が簡単な自己紹介です。そして本題に入りたいと思いますが、自分が「数学を勉強して人生に役立ったなあ」と感じたことを話したいと思います。

私は会社員になって10年、主に物流と営業を経験してきましたが、学生時代に勉強していた数学理論を実務の中でそのまま応用するということは殆どありません。但し、一つ大切なことを意識するようになりました。それは表現論からの話になりますが、「抽象的で分かりづらい群や環などを、行列という良く分かる具体的なものに変換して研究する」という思想で、そのような「分かりやすく表現する」という数学的な考え方を教わったと思います。例えば、説明資料を作るにしても、報告書を作るにしても、実際に見る側がそれを理解できなかつたら失敗作だと思います。Steve Jobs の製品発表会のプレゼンテーションが良い例だと思います。スライド1枚に数字とか漢字

をたくさん入れて難しそうな文章にするよりも、シンプルな絵や図形に変えてビジュアル化したほうが、誤解なく伝わりやすいと感じます。これをもって「百聞は一見に如かず」と言うのでしょうか？

特に、後輩や部下を持つようになると、日常の指導や業務の引継ぎなどをするたびに、自分の考え方や言いたいことをいかに彼らに正しく理解してもらえるか、自分の気持ちをやさしく誤解なく彼らに伝えることができるかを常に考えるようになり、また自分なりに教え方などをいろいろ工夫することようになりました。

自分としては、「具体的に、直感的に、分かりやすく表現する」ことなら、世界どこでも通用するものだと思っている次第です。現在、私が勤めている三井化学も国際化を謳っていますから、もしかして3年後あるいは5年後、自分が海外赴任になることもあると思います。まさに自分が中国から日本にやってきた十数年前と同じような状況になるわけです。自分ひとりが外国人として、今までとは違う文化の世界に入るわけで、言葉がうまく通じないこともあるでしょうし、価値観や生活スタイルの差異に驚くこともあるかもしれません。そういったときに、私が学生時代に習った表現論の考え方で初心を忘れず、自分の気持ちや言いたいことを「分かりやすく表現する」ということを心掛けながら、今まで感じてきた日本の素晴らしさも一緒にアピールしたいと思います。

本日は、スピーチの機会をいただきまして、ありがとうございます。

以上